

試験及び試問結果の要旨	
学位申請者 氏 名	三原 吉平
審査委員	主査 鹿児島大学 教授 藤木 誠
	副査 山 口大学 教授 谷 健二
	副査 鹿児島大学 教授 有村 卓朗
	副査 鹿児島大学 教授 矢吹 映
	副査 鹿児島大学 教授 三浦 直樹
外国語試験の受験年月日	— 年 — 月 — 日
外国語試験の結果	— 合 ・ 否 — (該当のものを○で囲むこと。)
試問の実施年月日	令和6年 7月 18日
試 問 方 法	<input checked="" type="radio"/> 口 答 ・ 筆 答 (該当のものを○で囲むこと。)
<p>最終試験では、申請者による学位論文の発表プレゼンテーションに続いて、審査員による口頭試問が行われた。プレゼンテーションでは、第1章において「研究の背景と目的、正常犬と僧帽弁閉鎖不全罹患犬における心エコーによる僧帽弁輪の評価法」に関する研究、第2章では「僧帽弁閉鎖不全罹患犬の弁形態と機能に対する僧帽弁形成術の介入効果」に関する研究を解説し、最後に総合考察を述べた。</p> <p>プレゼンテーションで使用されたスライドは、申請者オリジナルの手術シエーマを入れる等、非常に理解しやすい仕上がりとなっており、その他、全体にわたって、文字サイズや背景色、図表の見易さにも配慮したものとなっていた。独自に改良を重ねた僧帽弁形成術の術式について、実際の手術録画を編集・製作した動画を交えて、要所に焦点を当てて理解し易くなるような工夫がされていた。口頭説明は明快かつ詳細で、適度な速さによる丁寧な説明を行い、予定時間に適った発表を行った。</p> <p>審査員からの質問に対しては、各質問の内容を正しく把握し、引用論文や当該研究結果や豊富な手術経験に基づいて回答を行った。申請者は、学位論文の骨子となった研究において、考察の限界や課題・改善点についても十分認識しており、必要な将来の研究デザインについても回答を行った。</p> <p>申請者は、日常の小動物臨床における診療・手術記録から得たデータをまとめて学位論文の骨子となる研究論文を作成しており、実験動物を使用した研究計画の申請・承認は必要としなかったが、論文作成を見据えた研究デザインやデータ解析に用いる統計的手法を入念に検討した上で実施しており、論文公表のための研究者倫理について十分に理解・遵守していると認められた。</p> <p>以上のことから、審査委員会は、申請者が鹿児島大学大学院共同獣医学研究科博士課程修了者としての学力と識見を充たし、博士（獣医学）の学位を与えるに十分な資格を有すると、委員全員の一致をもって承認した。</p>	